パワーデバイスにおける ライフタイム制御と周辺の高耐圧化

群馬大学 松田順一

概要

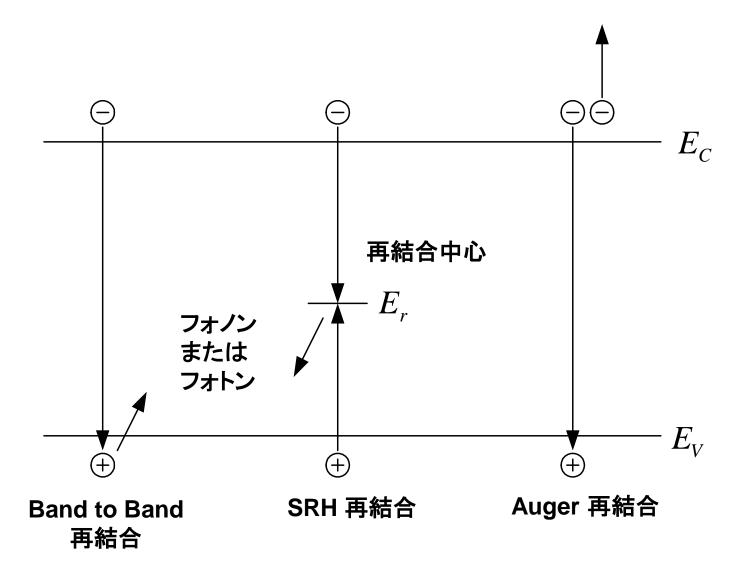
- 1. パワーデバイスのライフタイム制御
 - 1. SRH再結合
 - 2. 空乏層内での電荷発生
 - 3. 再結合準位の最適化
 - 4. ライフタイム制御
 - 5. Auger再結合
- 2. パワーデバイス周辺の高耐圧化
 - 1. アバランシェブレークダウン
 - 2. 階段型接合ダイオード
 - 3. パンチスルーダイオード
 - 4. 線型傾斜接合ダイオード
 - 5. 拡散接合ダイオード
 - 6. 周辺の終端構造
 - 1. プレーナ接合終端
 - 2. フローティング・フィールド・リング(単一とマルチ)終端
 - 3. フィールドプレート

After B. Jayant Baliga

(注)群馬大学アナログ集積回路研究会 第80回講演会(2)(2008年3月24日)資料から作成

パワーデバイスのライフタイム制御

再結合プロセス



SRH再結合

再結合率(定常状態、単一準位の再結合中心)

$$U = \frac{\delta n p_0 + \delta p n_0 + \delta n \delta p}{\tau_{p0} (n_0 + n_1 + \delta n) + \tau_{n0} (p_0 + p_1 + \delta p)}$$

 δn :過剰電子密度

 δp :過剰正孔密度

 n_0 :平衡状態電子密度

 p_0 :平衡状態正孔密度

 τ_{n0} :高ドープp型Si内の少数キャリア(電子)ライフタイム

 τ_{p0} :高ドープ \mathbf{n} 型Si内の少数キャリア(正孔)ライフタイム

n:平衡状態電子密度(フェルミ準位 = 再結合準位)

p₁:平衡状態正孔密度(フェルミ準位 = 再結合準位)

$$n_1 = N_C e^{(E_r - E_c)/kT}, \quad p_1 = N_v e^{(E_v - E_r)/kT}$$

ライフタイム

• ライフタイム(空間電荷中性: $\delta n = \delta p$)

$$\tau = \frac{\delta n}{U} = \tau_{p0} \left(\frac{n_0 + n_1 + \delta n}{n_0 + p_0 + \delta n} \right) + \tau_{n0} \left(\frac{p_0 + p_1 + \delta n}{n_0 + p_0 + \delta n} \right)$$

• 規格化ライフタイム(n型Si: $n_0 > p_0$, $N_c \approx N_v$)

$$\frac{\tau}{\tau_{p0}} = \left[1 + \frac{1}{1+h}e^{(E_r - E_F)/kT}\right] + \zeta \left[\frac{h}{1+h} + \frac{1}{1+h}e^{(2E_i - E_r - E_F)/kT}\right]$$

但し、
$$h = \frac{\delta n}{n_0}$$
, $\zeta = \frac{\tau_{n0}}{\tau_{p0}}$

n型Siで考察

少数キャリアライフタイム

$$\tau_{n0} = \frac{1}{C_n N_r} = \frac{1}{V_{Tn} \sigma_{cn} N_r}, \quad \tau_{p0} = \frac{1}{C_p N_r} = \frac{1}{V_{Tp} \sigma_{cp} N_r}$$

 C_n : 再結合中心での電子の捕獲率

 C_n : 再結合中心での正孔の捕獲率

 V_{T_n} :電子の熱速度

 V_{T_p} :正孔の熱速度

 σ_{cn} :再結合中心での電子の捕獲断面積

 σ_{cn} :再結合中心での正孔の捕獲断面積

N_r:再結合中心の密度

$$\Rightarrow \zeta = \frac{\tau_{n0}}{\tau_{p0}} = \frac{V_{Tp}\sigma_{cp}}{V_{Tn}\sigma_{cn}} = 0.827 \frac{\sigma_{cp}}{\sigma_{cn}}$$

σ: 再結合中心密度に依存しなく、温度の弱い関数

注入レベルによるライフタイム

低レベル注入 h = 8n/n₀ ≪ 1

$$\frac{\tau_{LL}}{\tau_{p0}} = \left[1 + e^{(E_r - E_F)/kT}\right] + \zeta e^{(2E_i - E_r - E_F)/kT}$$

⇒ 注入キャリア密度に無関係 (再結合準位位置(E_r)とキャリア捕獲断面積比(ζ)に依存)

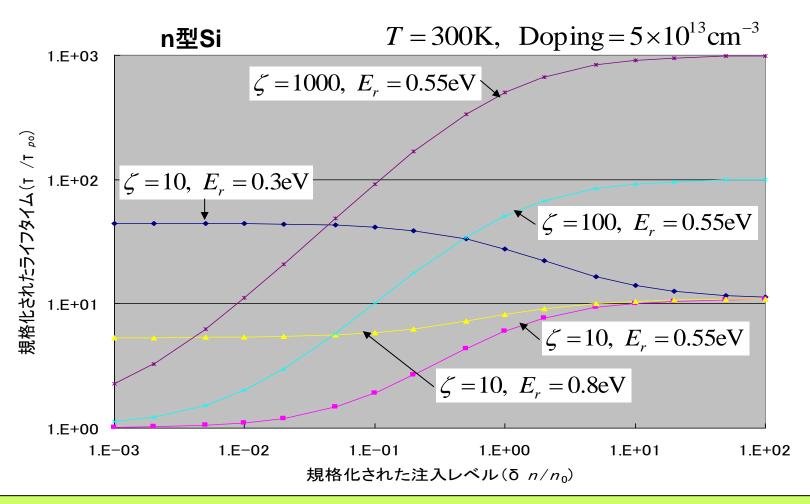
• 高レベル注入 $h = \delta n/n_0 \gg 1$

$$\frac{\tau_{HL}}{\tau_{p0}} = \left(1 + \zeta\right)$$

⇒ 一定値に漸近

(再結合準位位置(Ε,)に依存しなく、捕獲断面積比(ζ)に依存)

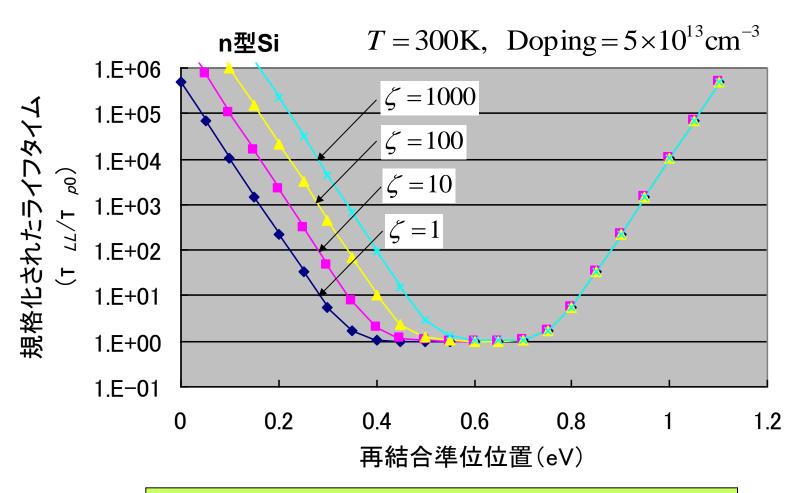
ライフタイムの注入レベル依存性



低レベル注入 $(h \ll 1)$ ライフタイム \Rightarrow 注入キャリア密度に無関係 $(E_r \& \zeta)$ に依存) 高レベル注入 $(h \gg 1)$ ライフタイム \Rightarrow 一定値に漸近 $(E_r \& \zeta)$ に依存せず、 ζ に依存)

低レベル注入時のライフタイム

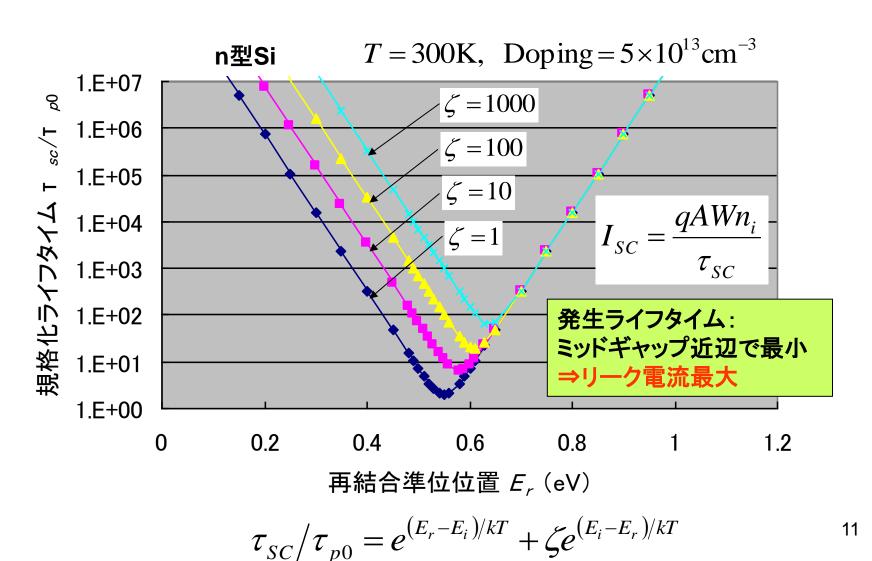
一再結合準位位置依存性一



ライフタイム: ミッドギャップ近辺で最小 ⇒ スピードアップ

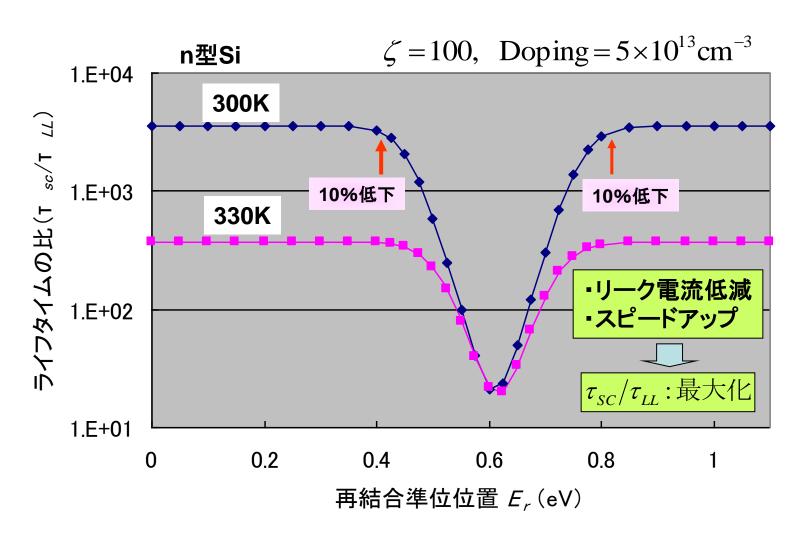
空間電荷発生ライフタイム

一再結合準位位置依存性一



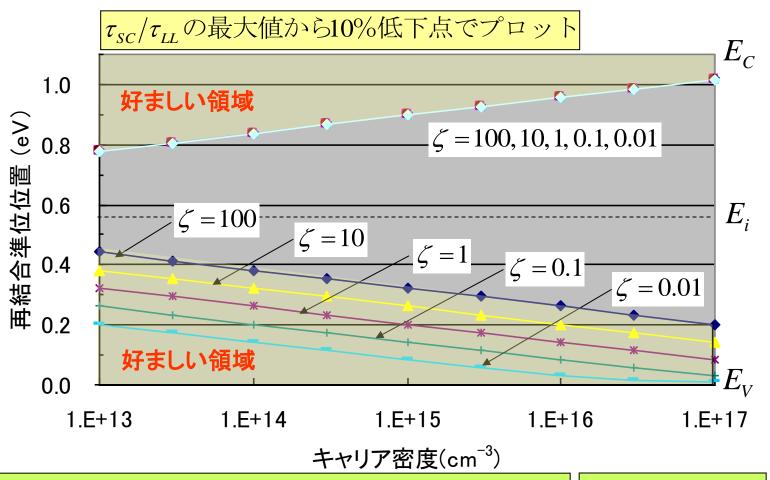
再結合準位位置の最適化

ー低レベル注入ー



再結合準位位置の最適領域

ー低レベル注入ー



ミッドギャップより上の好ましい領域 ⇒ 全てのζに適用 ミッドギャップより下の好ましい領域 ⇒ 大きなζが良好 低ドープ材料 ⇒広い最適領域

ライフタイム比 $(\mathbf{T}_{SC}/\mathbf{T}_{LL})_{max}$ のキャリア密度依存性 -低レベル注入-

低ドーピング密度かつ高温 ⇒ (T_{SC}/T_{LL})_{max} 低減

⇒ 高抵抗基板:T_{LL}の低減にはリーク電流増大が伴う(低抵抗基板と比較)

高レベル注入時のライフタイム

一最適な再結合準位位置一

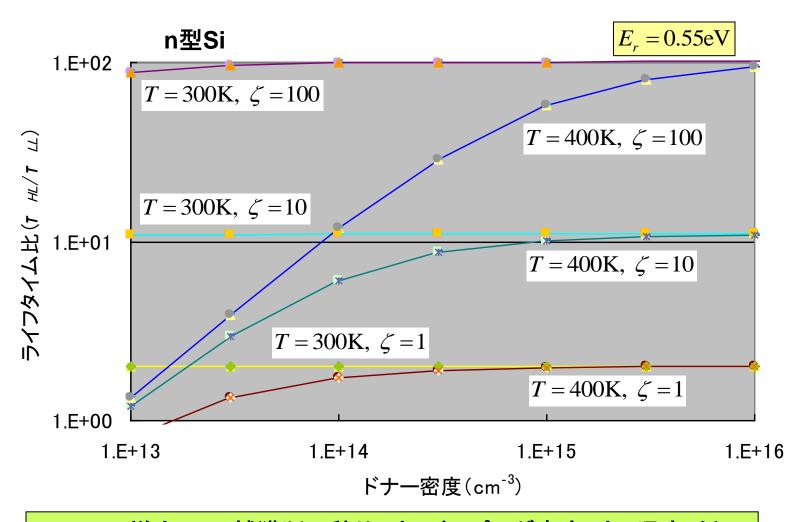
- パワーデバイスに求められる条件
 - 伝導度変調の増大
 - 高レベル注入ライフタイムの最大化
 - スイッチング過程のスピードアップ
 - 低レベル注入ライフタイムの最小化
- 最適な再結合準位位置

$$\frac{\tau_{HL}}{\tau_{LL}} = \frac{1 + \zeta}{1 + e^{(E_r - E_F)/kT} + \zeta e^{(2E_i - E_F - E_r)/kT}} \implies 最大化(最適)$$

$$\frac{d}{dE_r} \left(\frac{\tau_{HL}}{\tau_{LL}} \right) = 0 \quad \Rightarrow \quad E_r = E_i + \frac{kT}{2} \ln(\zeta)$$

最適な再結合準位位置 ⇒ 捕獲断面積比と温度に依存

ライフタイム比 (T_{HL}/T_{LL}) のドナー密度依存性 ー高レベル注入ー



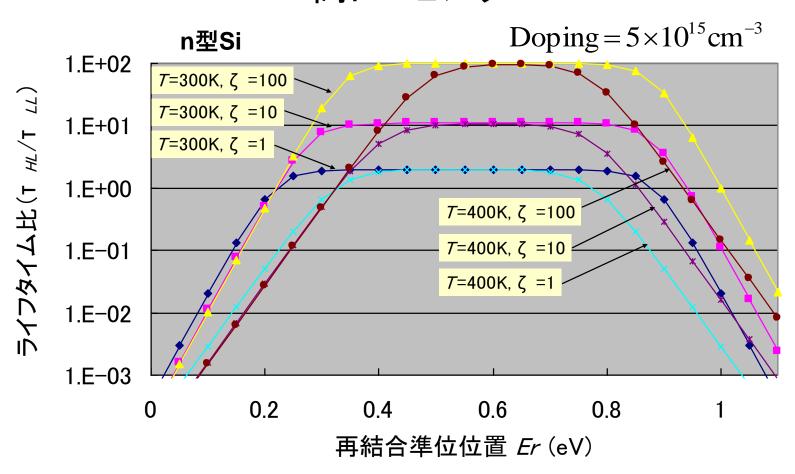
低⇒高レベル注入ライフタイムへの移行

• 最適な再結合準位位置

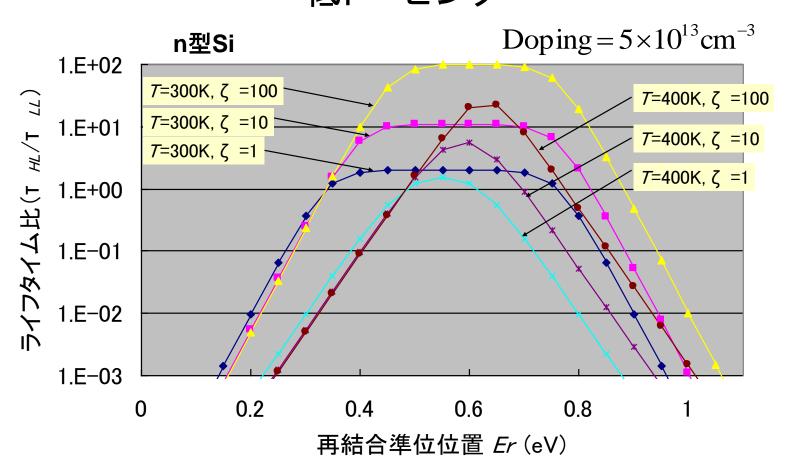
- ⇒ 伝導度変調増大/スイッチング過程のスピードアップ最大化条件と同じ
- ⇒ 最適位置では空間電荷リーク電流増大

(リーク電流を抑えた最適化を図る必要有)

ライフタイム比(T_{HL}/T_{LL})とE_r ー高ドーピングー

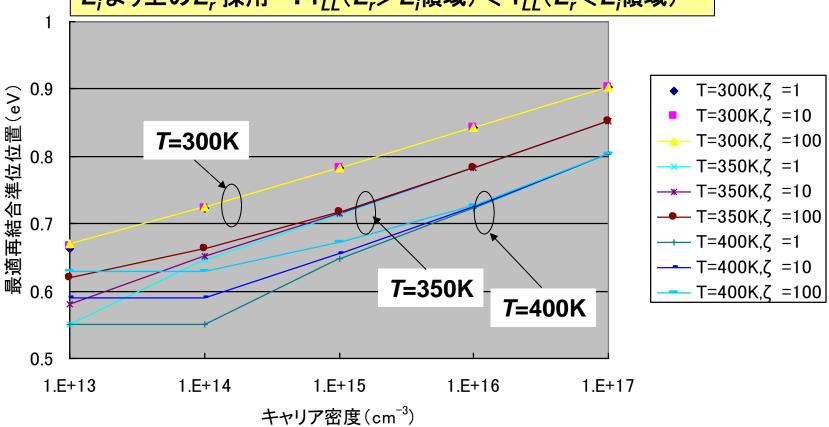


ライフタイム比(T_{HL}/T_{LL})とE_r



高レベル注入時の最適なEr位置

最適位置 $\Rightarrow T_{HL}/T_{LL}$ のピーク位置から10%低下位置 E_i より上の E_r 採用 : $T_{LL}(E_r > E_i$ 領域) $< T_{LL}(E_r < E_i$ 領域)



最適再結合準位位置:キャリア密度の低下と共にミッドギャップに接近 (⇒ 高電圧デバイスではリーク電流低減難)

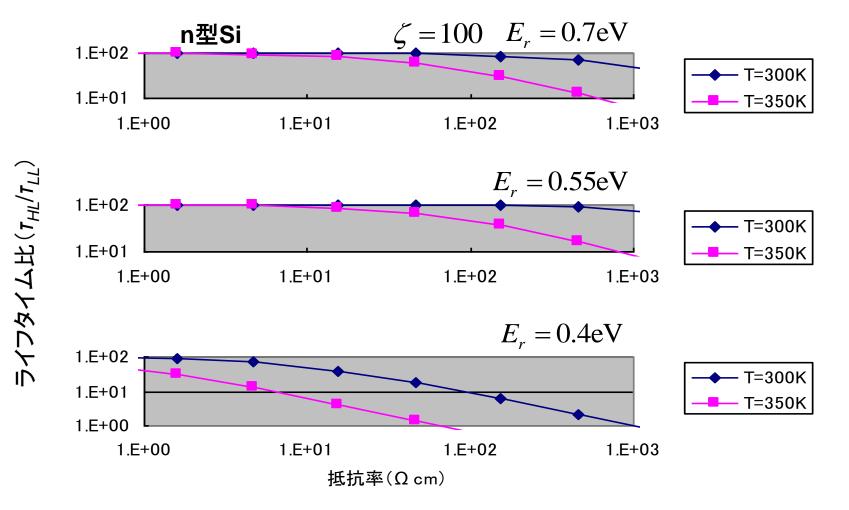
補償効果

- ・ 再結合準位密度 ≅ドナー密度
 - 電子:ドナー準位 ⇒ 再結合準位
 - ・ 伝導帯中の正味の電子低減⇒抵抗率増大
 - ブレークダウン電圧と伝導状態に影響
 - 対策
 - 再結合準位密度の低減
 - ・ 電子と正孔のキャリア捕獲断面積拡大

$$\tau_{n0} = \frac{1}{C_n N_r} = \frac{1}{V_{Tn} \sigma_{cn} N_r}, \quad \tau_{p0} = \frac{1}{C_p N_r} = \frac{1}{V_{Tp} \sigma_{cp} N_r}$$

ライフタイム比(T_{HI}/T_{II})の抵抗率依存性

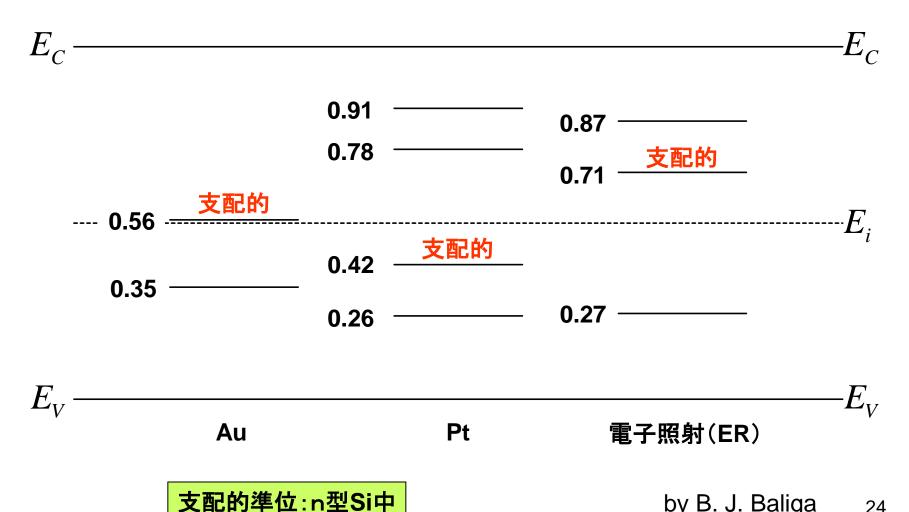
一同じ深い準位の不純物の採用ー



ライフタイム制御

- ・ 深い準位の形成
 - 不純物拡散(Au、Ptなど)
 - · 拡散温度:800~900℃
 - 高エネルギー粒子注入(空孔、格子間原子)
 - 電子、y線、プロトン、He注入
 - デバイス完成後室温プロセスで処理
 - ドーズ量によるライフタイムの制御
 - デバイス特性のばらつき小
 - デバイス特性のトリミング可能(追加注入)
 - 照射ダメージのアニールアウト(400℃以下で可能)
 - クリーンプロセス

Si中の再結合準位位置



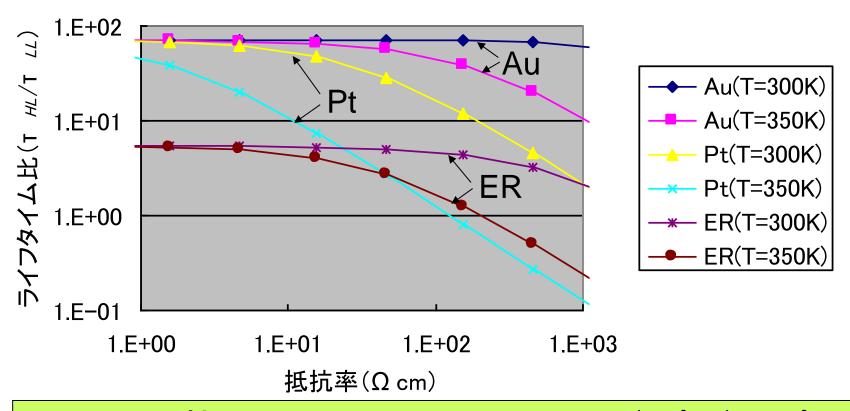
by B. J. Baliga

Si中の支配的再結合準位

-Au, Pt, ER-

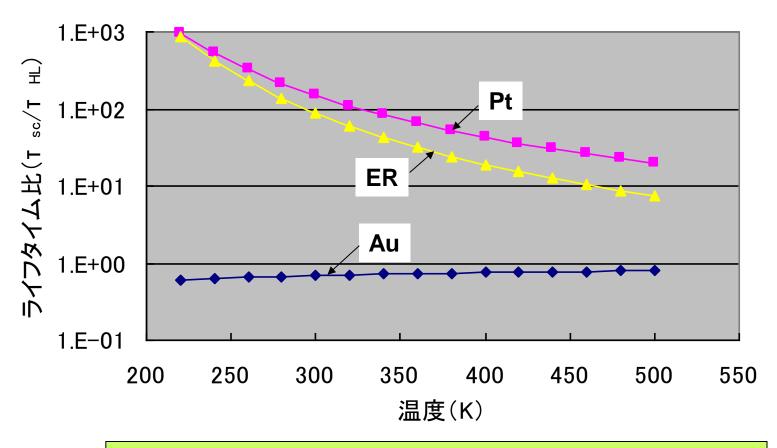
不純物	再結合 準位位置 (eV)	捕獲断面積		ζ (τ _{n0} /τ _{p0})
		正孔(cm²)	電子(cm²)	(n ₀ / p ₀ /
Au	0.56	6.08×10^{-15}	7.21 × 10 ⁻¹⁷	69.7
Pt	0.42	2.70×10^{-12}	3.20×10^{-14}	69.8
電子照射 (ER)	0.71	8.66 × 10 ⁻¹⁶	1.61 × 10 ⁻¹⁶	4.42

ライフタイム比(T_{HL}/T_{LL})の抵抗率依存性 -Au、Pt、電子照射(ER)-



Au(ERと比較): THL/TLL大 ⇒ VF: 低、スイッチングスピート・: アップ

ライフタイム比(T_{SC}/T_{LL})の温度依存性 -Au、Pt、電子照射(ER)-



リーク電流低減(順方向伝導特性で規格化) ⇒ ER、Pt > Au

Augerライフタイム

• 高濃度n型Siへの低レベル注入の場合

$$\tau_A^N = \frac{1}{2.8 \times 10^{-31} n^2}$$
 n:電子密度

• 高濃度p型Siへの低レベル注入の場合

$$\tau_A^P = \frac{1}{1 \times 10^{-31} p^2}$$
 $p: 正孔密度$

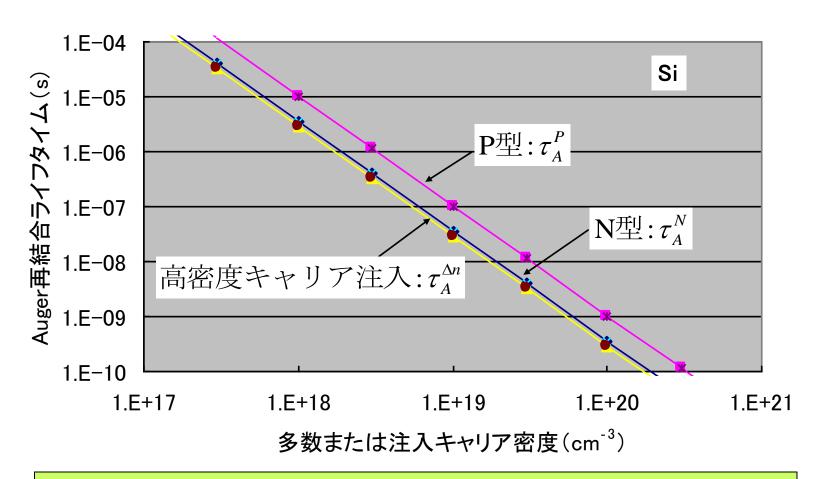
• 低濃度(高抵抗)n型Siへの高レベル注入

$$\tau_A^{\Delta n} = \frac{1}{3.4 \times 10^{-31} \Delta n^2}$$
 Δn : 過剰キャリア密度

実効的なライフタイム

$$\frac{1}{\tau_{eff}} = \frac{1}{\tau_{SRH}} + \frac{1}{\tau_{A}}$$

Auger再結合ライフタイム



Auger再結合 ⇒ 高濃度領域(P+、N+)、高密度キャリア注入で顕著 (サージ電流(n>10¹⁸cm⁻³)時に伝導特性とスイッチングスピードに影響)

パワーデバイス周辺の高耐圧化

平行平板型接合の臨界電界

アバランシェ破壊条件

$$\int_{0}^{W} \alpha dx = 1$$

 $\begin{cases} E(x) = \frac{qN_A}{\varepsilon_S} (W - x) \\ V(x) = \frac{qN_A}{\varepsilon_S} (Wx - x^2/2) \end{cases}$ $\alpha = 1.85 \times 10^{-35} E^7 : インパクトイオン化係数$

W:空乏層幅

• 臨界電界時の空乏層幅とアバランシェ破壊電圧

$$W_{c,PP} = 2.67 \times 10^{10} N_A^{-7/8}, \quad BV_{PP} = 5.34 \times 10^{13} N_A^{-3/4}$$

臨界電界

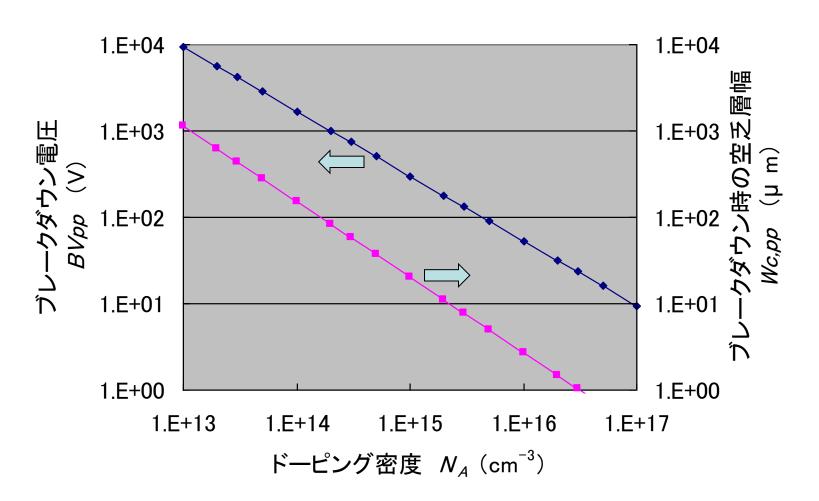
$$E_{c,PP} = 4.01 \times 10^3 N_A^{1/8}$$

臨界電界時の基本的関係

- ・アバランシェ破壊電圧
- ・ドーピング密度
- •空乏層幅

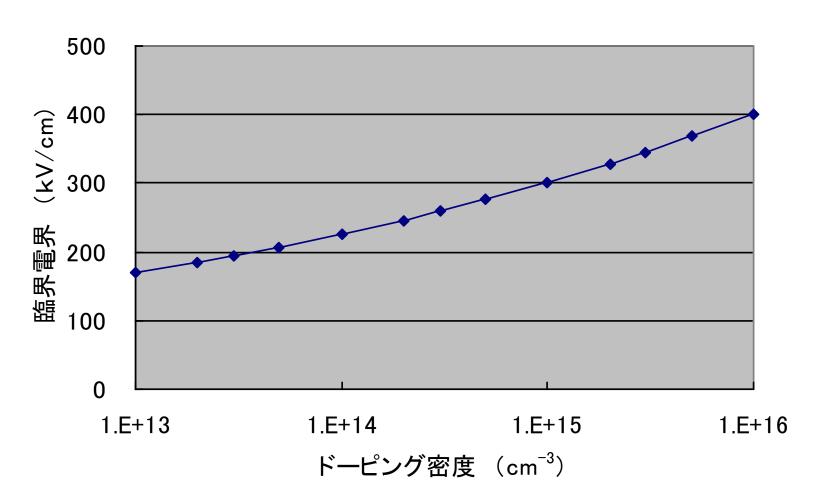
ブレークダウン電圧と空乏層幅

一階段型接合一



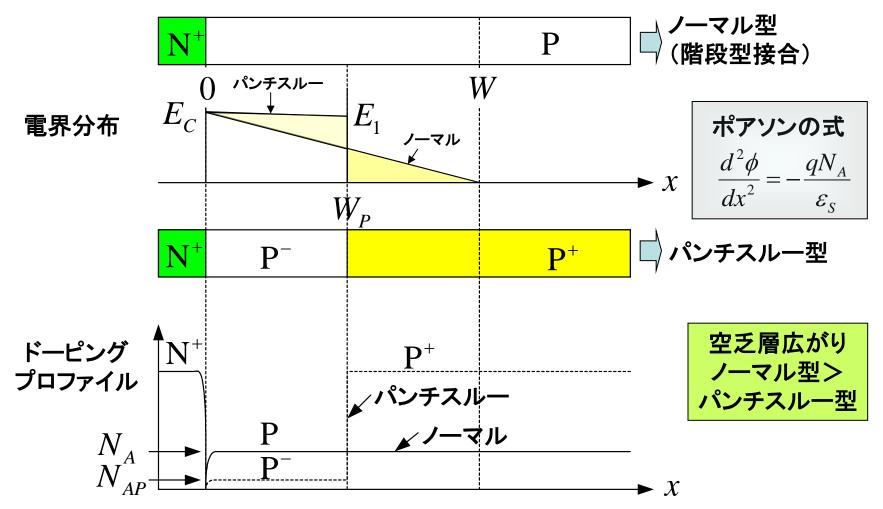
臨界電界とドーピング密度との関係

一階段型接合一

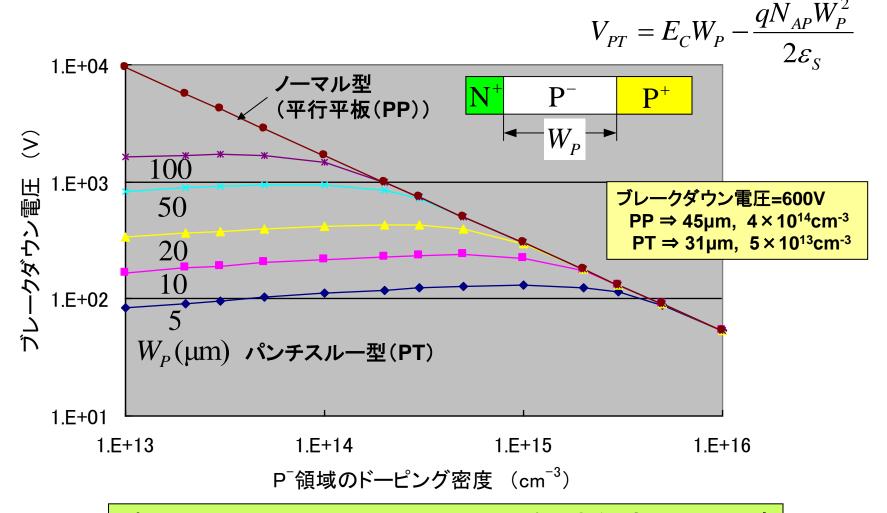


ノーマルとパンチスルーダイオードの比較

ー電界分布とドーピングプロファイルー

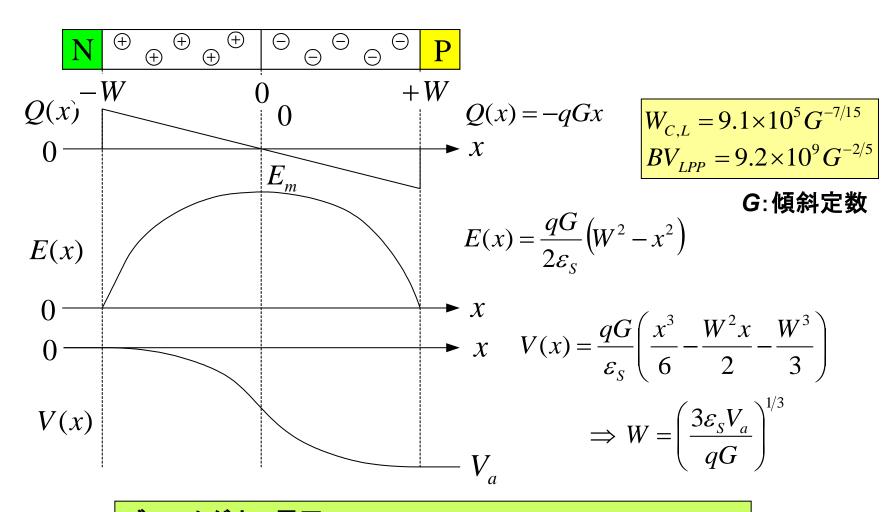


パンチスルーダイオード ーブレークダウン電圧 vs. ドーピング密度ー



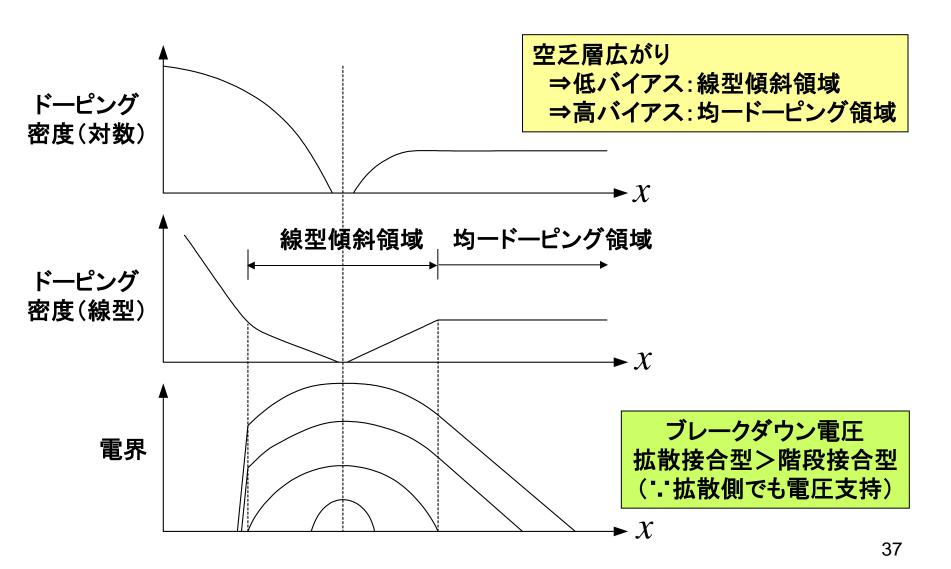
パンチスル一型はノーマル型に比べ W_P を小さくできる $\Rightarrow R_{on}$ 減

線型傾斜接合ダイオード

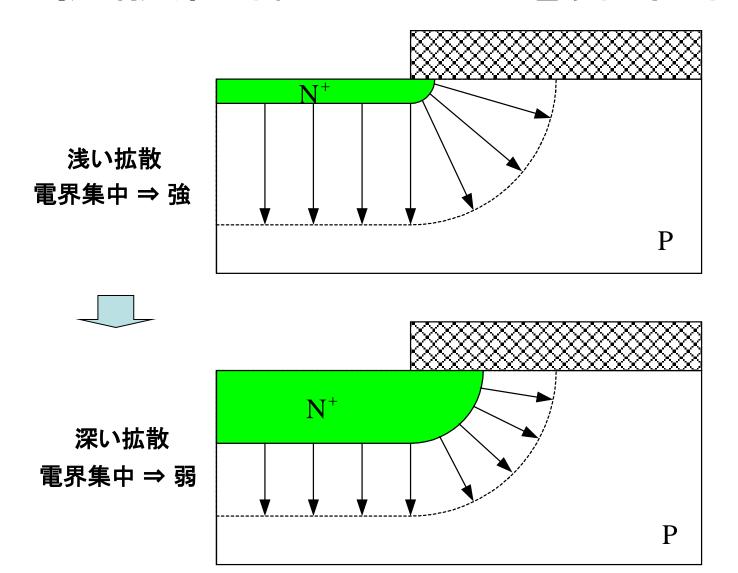


ブレークダウン電圧 線型傾斜型接合>階段型接合 (::拡散側への空乏層拡張)

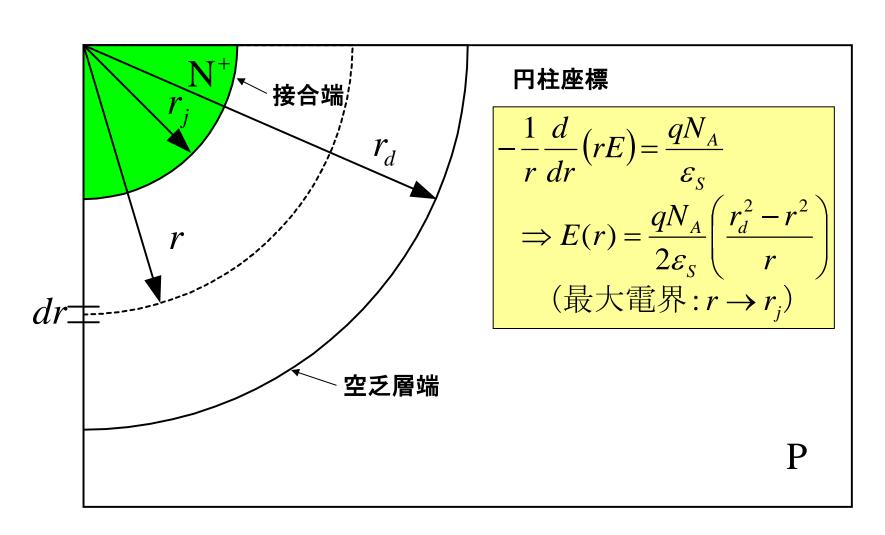
拡散接合ダイオード



拡散層端に於ける電界集中



円柱型接合の断面



円柱型接合の電界と電位分布

• 円柱型接合と平行平板型接合の最大電界比

$$E_{m,CYL} = \frac{qN_A}{2\varepsilon_S} \frac{r_d^2}{r_j} \qquad (r_d \gg r_j)$$

$$E_{m,PP} = \frac{qN_A}{\varepsilon_S} r_d$$

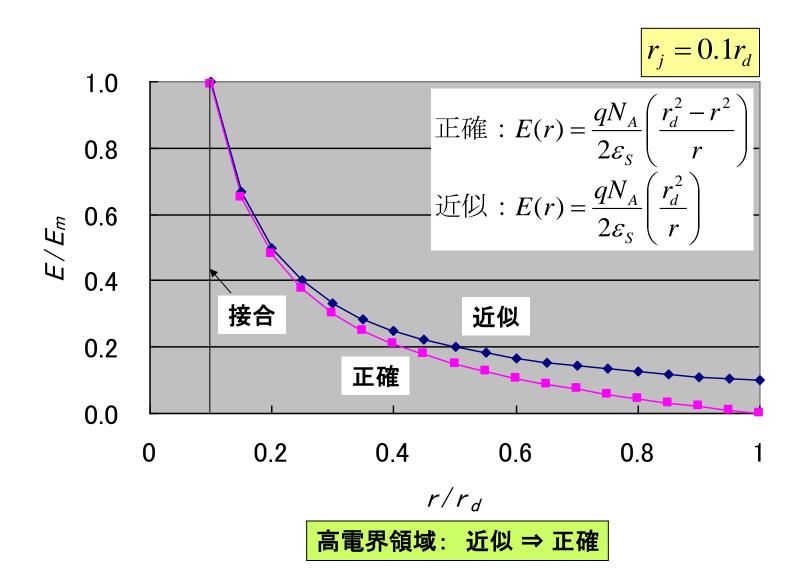
$$r_d \gg r_j \Rightarrow E_{m,CYL} \gg E_{m,PP}$$

$$r_d \gg r_j \Rightarrow E_{m,CYL} \gg E_{m,PP}$$

• 雷位分布

$$V(r) = \frac{qN_A}{2\varepsilon_S} \left[\left(\frac{r_j^2 - r^2}{2} \right) + r_d^2 \ln \left(\frac{r}{r_j} \right) \right]$$

円柱型接合における電界の近似



円柱型接合の臨界電界

• 近似電界を用いてアバランシェ破壊条件計算

$$\int_{r_j}^{\infty} \alpha dr = 1, \quad \alpha = 1.85 \times 10^{-35} E^7, \quad E \cong \frac{qN_A}{2\varepsilon_S} \left(\frac{r_d^2}{r}\right)$$

$$\Rightarrow K = \frac{qN_A}{2\varepsilon_S} r_d^2 = \left(\frac{6r_j^6}{1.85 \times 10^{-35}}\right)^{1/7}$$

臨界電界

$$E_{m,CYL} \Rightarrow E_{c,CYL} = \left(\frac{3.25 \times 10^{35}}{r_j}\right)^{1/7}$$

臨界電界・ブレークダウン電圧の比較

一円柱型/平行平板型一

・ 臨界電界の比

$$\frac{E_{c,CYL}}{E_{c,PP}} = \left(\frac{3W_{c,PP}}{4r_j}\right)^{1/7}$$

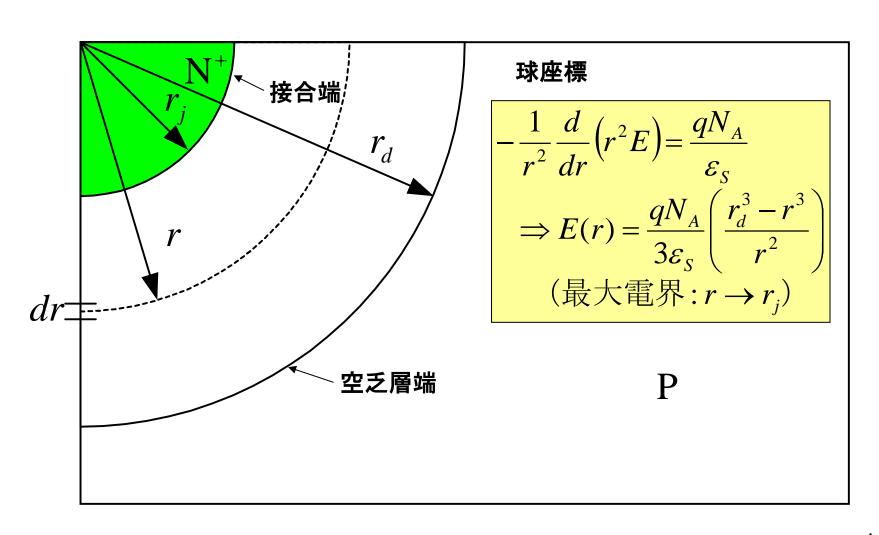
$$E_{c,CYL} > E_{c,PP}$$
 低ドープ領域のドーピング密度が同じ場合

・ブレークダウン電圧の比

$$\frac{BV_{CYL}}{BV_{PP}} = \frac{1}{2} \left[\left(\frac{r_j}{W_{c,PP}} \right)^2 + 2 \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}} \right)^{6/7} \right] \ln \left[1 + 2 \left(\frac{W_{c,PP}}{r_j} \right)^{8/7} \right] - \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}} \right)^{6/7}$$

但し、
$$W_{c,PP}\gg r_{j}$$

球型接合の断面



球型接合の電界と電位分布

• 球型接合と円柱型接合の最大電界比

$$E_{m,SP} = \frac{qN_A}{3\varepsilon_S} \frac{r_d^3}{r_j^2} \qquad (r_d \gg r_j)$$

$$E_{m,CYL} = \frac{qN_A}{2\varepsilon_S} \frac{r_d^2}{r_j} \qquad (r_d \gg r_j)$$

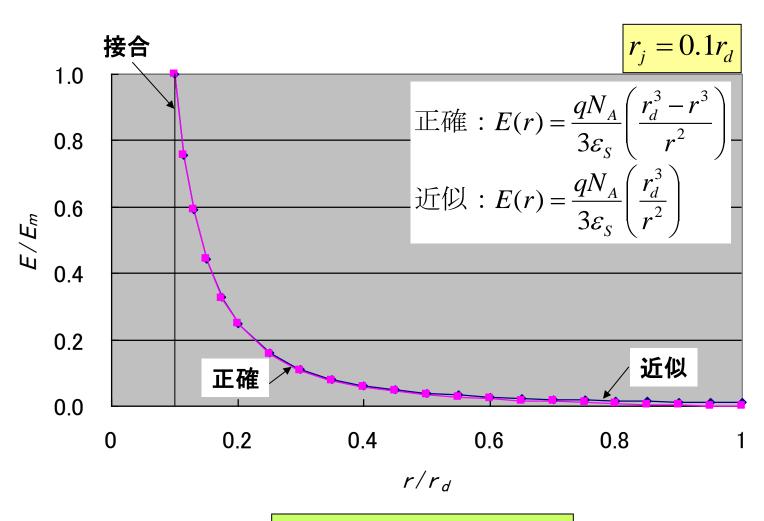
$$r_d \gg r_j \implies E_{m,CYL} \gg E_{m,CYL}$$

• 雷位分布

$$V(r) = \frac{qN_A}{3\varepsilon_S} \left[\left(\frac{r_j^2 - r^2}{2} \right) + r_d^3 \left(\frac{1}{r_j} - \frac{1}{r} \right) \right]$$

 $r \rightarrow r_d$ 、 $V(r) \rightarrow V_a$ (印加電圧) $\Rightarrow r_d$ が求まる

球型接合における電界の近似



高電界領域: 近似 ⇒ 正確

球型接合の臨界電界

• 近似電界を用いてアバランシェ破壊条件計算

$$\int_{r_{j}}^{\infty} \alpha dr = 1, \quad \alpha = 1.85 \times 10^{-35} E^{7}, \quad E \cong \frac{qN_{A}}{3\varepsilon_{S}} \left(\frac{r_{d}^{3}}{r^{2}}\right)$$

$$\Rightarrow K_{S} = \frac{qN_{A}}{3\varepsilon_{S}} r_{d}^{3} = \left(\frac{13r_{j}^{13}}{1.85 \times 10^{-35}}\right)^{1/7}$$

臨界電界

$$E_{m,SP} \Longrightarrow E_{c,SP} = \left(\frac{7.03 \times 10^{35}}{r_j}\right)^{1/7}$$

臨界電界・ブレークダウン電圧の比較

一球型/平行平板型一

・ 臨界電界の比

$$\frac{E_{c,SP}}{E_{c,PP}} = \left(\frac{13W_{c,PP}}{8r_j}\right)^{1/7}$$

$$E_{c,SP} > E_{c,PP}$$
 低ドープ領域のドーピング密度が同じ場合

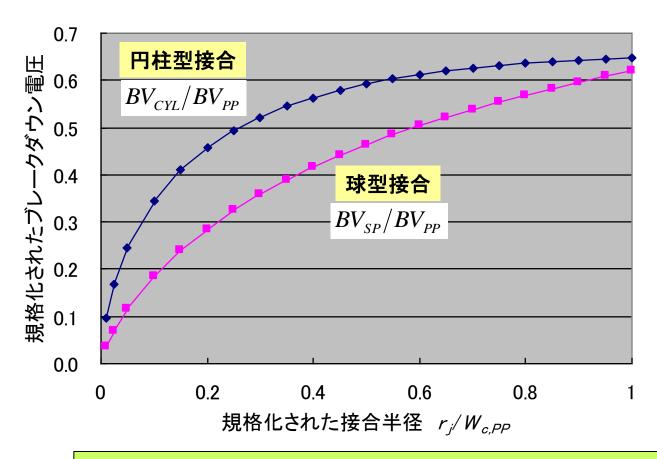
・ブレークダウン電圧の比

$$\frac{BV_{SP}}{BV_{PP}} = \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}}\right)^2 + 2.14 \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}}\right)^{6/7} - \left[\left(\frac{r_j}{W_{c,PP}}\right)^3 + 3\left(\frac{r_j}{W_{c,PP}}\right)^{13/7}\right]^{2/3}$$

但し、
$$W_{c,PP}\gg r_{j}$$

規格化されたブレークダウン電圧

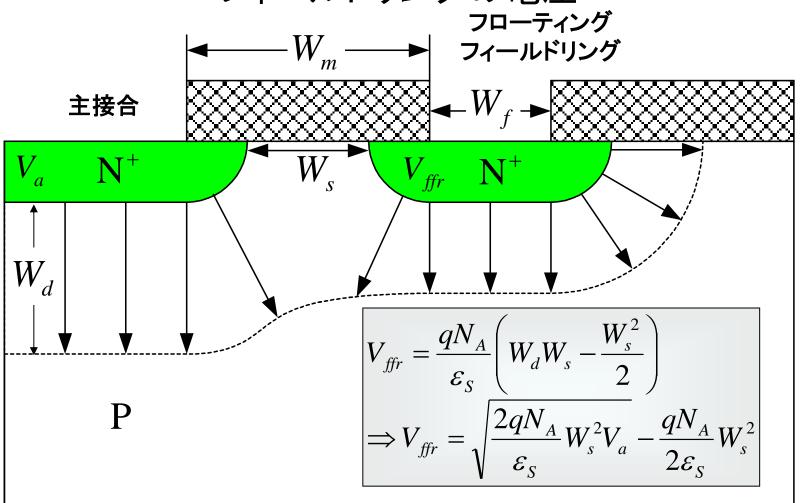
一円柱型と球型接合一



ブレークダウン電圧 円柱型接合>球型接合

コーナー部での耐圧の増大化(球型 \rightarrow 円柱型接合耐圧) \Rightarrow コーナー部の半径: $W_{c,pp}$ の2倍

ーフィールドリングの電圧ー



仮定:フローティング・フィール・ドリング⇒空乏層広がりを乱さない

一最適配置時のブレークダウン電圧ー

- 仮定
 - フローティング・フィールド・リング(FFR)端の電界:円柱型接合の電界
 - ブレークダウン時:FFR端の電界=主接合端の電界(円柱型接合臨界電界)
 - 主接合の電界:主接合とFFRの電位差から決定
- ブレークダウン時の FFR の電圧 V_F

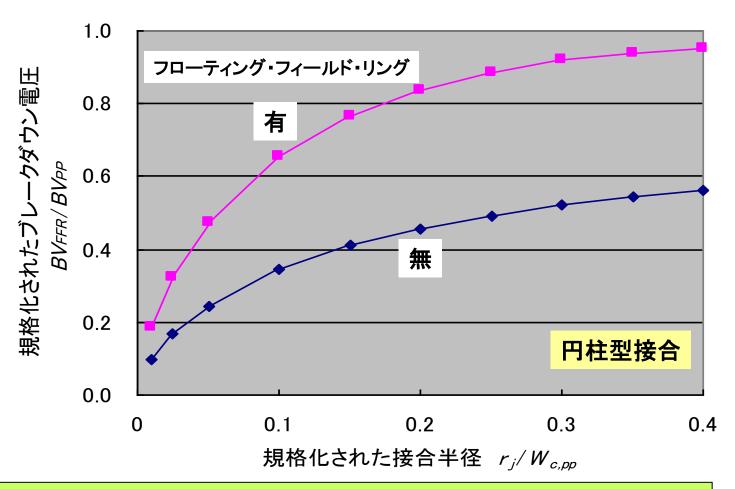
$$V_F/BV_{PP} = BV_{CYL}/BV_{PP}$$

• ブレークダウン時の主接合とFFRとの間の電位差

$$\frac{BV_{FFR} - V_F}{BV_{PP}} = \frac{1}{2} \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}} \right)^2 - 0.96 \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}} \right)^{6/7} + 1.92 \left(\frac{r_j}{W_{c,PP}} \right)^{6/7} \ln \left[1.386 \left(\frac{W_{c,PP}}{r_j} \right)^{4/7} \right]$$

BV_{FFR}:ブレークダウン時の主接合の電圧

ーリングの有無によるブレークダウン電圧の比較ー

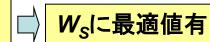


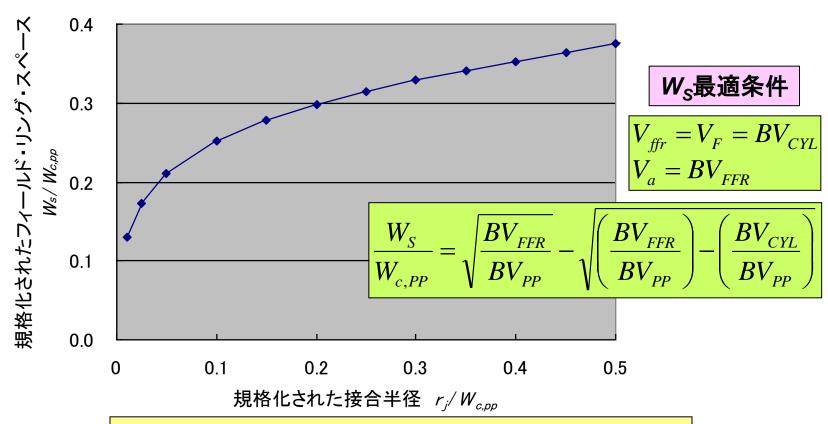
単一フローティング・フィールド・リング(有/無)⇒ブレークダウン電圧約2倍上昇

一最適フィールド・リング・スペースー

W_S大:円柱型接合(リング無)と同等 ⇒ BV_{FFR}の低下

W_S小: リングの電位は主接合と同等 ⇒ BV_{FFR}の低下

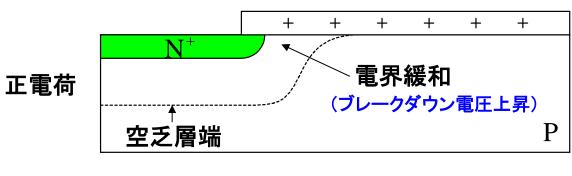


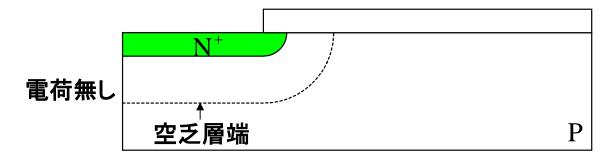


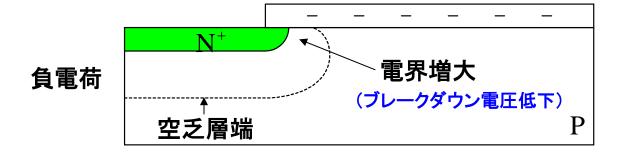
実際にはプレーナ接合の横方向拡散を考慮する必要有

円柱型接合端での空乏層広がり

ー界面電荷の影響ー







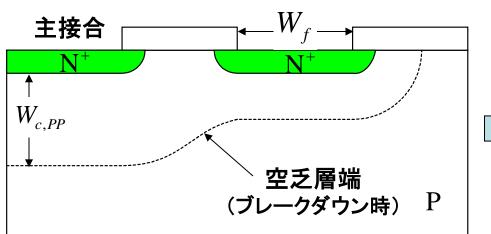
単一FFRの場合 (正の界面電荷) ⇒リーチスルー電圧低下

FFRのスペース拡張 (界面電荷を考慮して 最適なWSを決定)

⇒界面電荷のばらつき

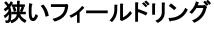
実用面での限界 ⇒ マルチFFR必要

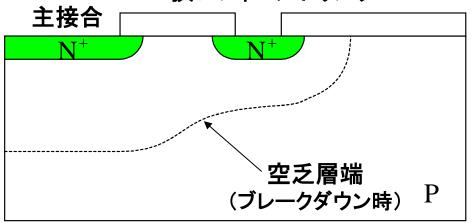
ーフィールドリング幅の空乏層広がりへの影響ー 広いフィールドリング





有効なフィールドリング幅 $W_f \Rightarrow W_{c,PP}$ $(W_{c,PP}$ 以上は必要なし)



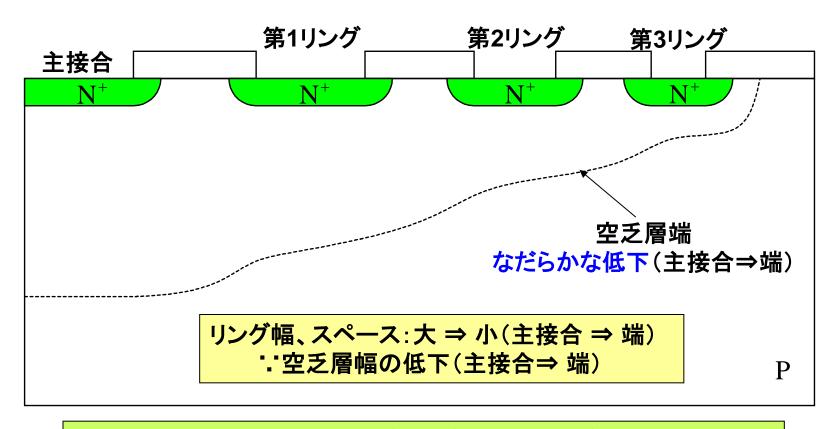




フィールドリングの効果低減 : 空乏層曲率の低下 (W_s最適下でも)

マルチプル・フィールド・リング

ーリング幅/スペース変化(方式1)ー

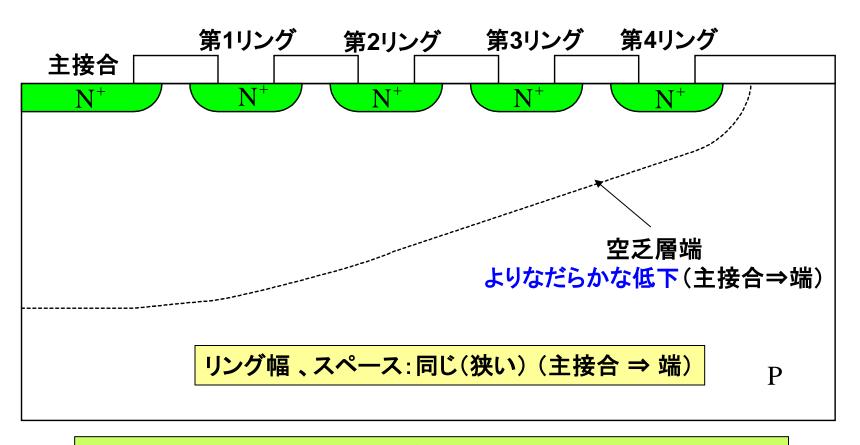


本方式 ⇒ 全てのフローティングリング端で同時にブレークダウン発生 (界面電荷を考慮する必要有)

ブレークダウン電圧は平行平板接合型の耐圧に接近(リング数増加)

マルチプル・フィールド・リング(2)

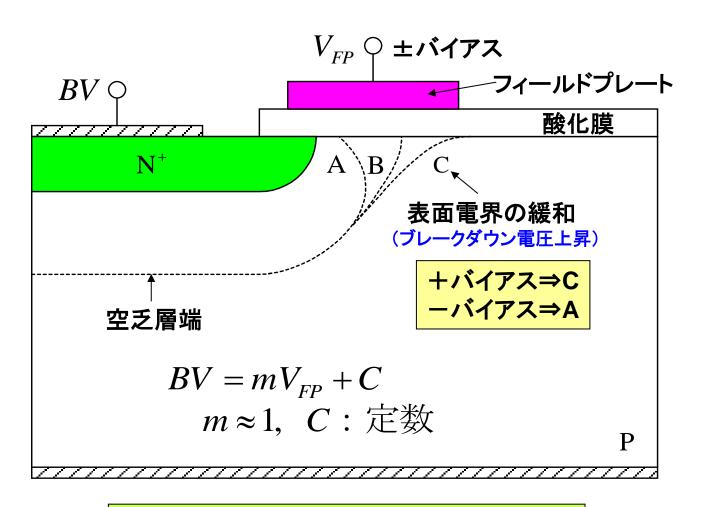
ーリング幅/スペース同じ(方式2)ー



本方式 ⇒ 界面電荷の変化の影響を低減(方式1との比較) (::リングの数が多いため)

ブレークダウン電圧は平行平板接合型の耐圧に接近(リング数増加)

フィールドプレートの効果

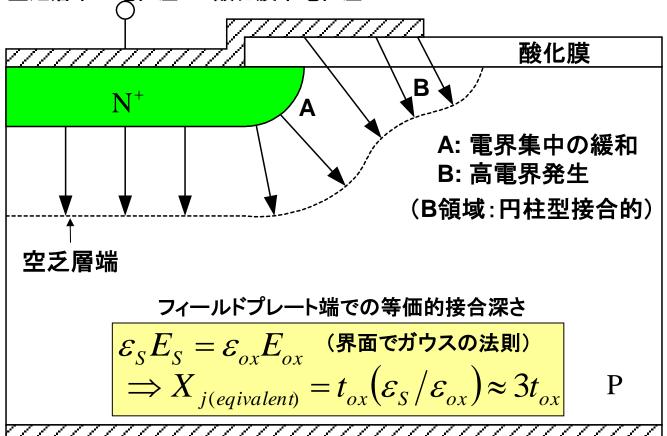


V_{FP}大:BV ⇒ 平行平板型接合の耐圧に接近

フィールドプレートを持つプレーナ接合

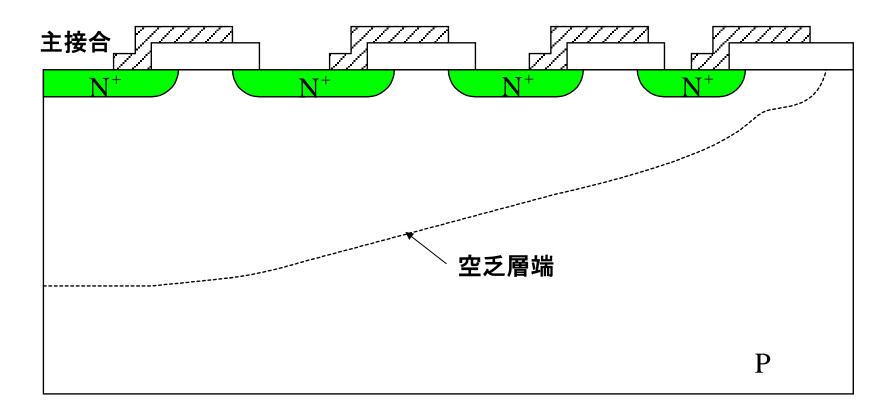
ー実用レベルー





 t_{ox} : 大 \Rightarrow フィールドプレート端(B)での電界緩和 (フィールドプレートのシャープコーナー回避 : 円柱型接合 \Rightarrow 球型接合)

フィールト、プレートとフィールト、リングの組合せ



- ・各フィールドリング:電界集中の緩和
- ・各フィールドプレート: 界面電荷の抑制(ブレーク電圧の安定性増大)